

---

# dreamers ~ 追憶の王 ~

ころり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

dreamers 追憶の王

### 【Nコード】

N3654D

### 【作者名】

ころり

### 【あらすじ】

ある出来事をきっかけに心を閉ざしてしまった主人公「ナイク」と彼が幼い頃に拾ったぬいぐるみ「紅蓮」。彼らの「夢」の冒険が始まる。

## 第0夢「プロローグ」（前書き）

多少刺激の強そうな表現が物語にときどき入っていますので苦手な  
かたはご遠慮ください。

## 第0夢「プロローグ」

モノクロの世界

昔見た彩りも忘れ。

今、彩ろうともせず。

ただ、ただ平坦な道を選び、進んで来た。

肉体は

より安直な方を好んで歩き残った心は

ダイヤモンドの様に堅い鎧に包まれ、死を待ち遠しく思っている。

今まで自分の何もかもを  
オブラートに包んできた

彼の名は

夢野 無幾

ユ

メノ ナイク

14歳

ただ死を待つ

哀しき少年。

何故彼は

全てを隠しているのだろう

懸命に生きようとはしないのだろう。

頼るべき者がいないのか？否、彼には彼を愛し続けた母がいる。

父は、彼が生まれた後すぐに事故でなくなってしまったが、母は彼を捨て逃げたりはしなかった。

では、何故彼はその心を閉ざしてしまったのだろうか？

彼の部屋にはその全てを知る者が息を潜め、そつと坐している。

そして、夜も更けると動きだし「夢の王国」への鍵を探している。

その者の名は

「紅蓮」

さあさあ、続きは彼らから直接聞こうじゃないか！！ぐずぐずしてはいられない夢が覚めてしまう前に 冒険の旅へと出掛けよう。

## 第1夢「ワカレ」

つまらない。

一体この世界のどこが面白いのか分からない。

ねえ・・・誰か教えてくれませんか？

第1夢「ワカレ」

僕は

買い物が嫌い

なぜなら・・・

わざわざ人の多いところに行かなくちゃいけないから

僕に関わる人が嫌い

なぜなら・・・

その人達の前では、頭が良くて、スポーツなんでも出来て、可愛い彼女がいる「夢野 無幾」を演じなきゃならないから。

僕の全ては「嘘」というオブジェクトにずっと包まれたまま。気が付いたら3年という月日が流れてた。

「ねえね！ナイク見て！」

「ん・・・」

「これ！可愛い」

「うん・・・そうだね」

日曜日のショッピング街。溢れる人込み、幸せそうな話し声。

「（あー、来るんじゃなかった）」

「今、何か言った？」

「いや、何にも。それ買ってくるよ」

ナイクは彼女のユイが持っていたネックレスをスツと取り上げた。

平日こそ学校に出ているが、それ以外は余り外で過ごすことはない。昔から誰かと関わりを持つことを極端に嫌がっていた。

今日のデートもユイの方から「付き合って1年になるから」とメールが着て、なんとなくその気になってみただけだった。

「え？いいよ！だってこれ高いし・・・」

「いいよ。久しぶりに出掛けただし、このくらいはね・・・」

「あ・・・うん。アリガト」「（さっさ会計して、はよ帰る）」

会計の人にネックレスを渡す、何も考えていなかったせいか「プレゼントですか？」

と言う質問にいつのまにか「はい」と返事していた。

商品がラッピングされている間

「いかにしてユイを言い包め早く帰るか」を考えていた。

支払いをして、綺麗にラッピングされた商品をもらう。

別にたいしたものでもないのに、店の人はメッセーじカードとボー

ルペンを差出して

「一言どつぞ」といつてきた。

「（さて、何を書こうか）」

ふと、ユイの方に目をやると僕が遅かったせいか　心配そうにこちらを見ていた。

「（いつつも、迷惑かけてるな）」

カードに「ありがとう」と、かいてみた。

そして、その前にもう一言付け加え、店員に渡した。カードを受けとった店員は少し青ざめた様子でカードをプレゼントに飾りナイクに渡した。

「ごめん。待ったよね」

「ううん、大丈夫！少しだけ心配だったけどね」

「そう。・・・はい、これ」「あ！可愛くラッピングしてもらったんだ、ありがとう。ナイク」  
「どうも」

ユイは本当にうれしそうな顔でプレゼントを受け取るとすぐにカードの存在に気付いた。

「ナイク、これ・・・」

「うん。・・・あのさ」

ナイクは今作れる最高の笑顔でユイに伝えた。



「別れよ。じゃね、バイバイ」

そう

ユイの持っているカードには、「今までありがとう」と書いてあったのだ。

.....

「ただいまー」

「ナイク、おかえり 久しぶりのデートはどうだった？」

「別れた」

家に帰ると嬉しそうにナイクを出迎えてきた母、アケミは息子のこ  
とばに啞然とした。

「え？今何ていったの。」

「・・・」

母の問い掛けに応じる事無く、ナイクは二階の自室へと向かう。

アケミは、そんなナイクの様子を一切気にせずひたすら色々な事を  
ナイクに問い掛けた。

なぜ別れたのか、どこに出掛けたのか、楽しくなかったのか、喧嘩  
してしまったのか・・・ナイクが部屋に着くまで後を追いつけ、問  
い掛けた。

しかし、ナイクは口を開かない。ドアノブに手が掛かったときアケ  
ミはもうダメだと思った。

不意に、ナイクがこちらを見て笑いかけた。

につこりといかにも優しそうな表情で口を開いた。

「もー、母さんは心配性なんだよ！そんなだから皺も増えるんだ」  
「なっ！！」

想像もつかないナイクの言葉にアケミは返す言葉が見つからなかった。

「まあ・・・一応、傷ついてるんだから、あんまりえぐるような事  
きかないでよね」

バタンッ

その言葉を最後に、ナイクの部屋のドアが閉まり、二人の間を遮った。

つづく

## 第1夢「ワカレ」（後書き）

これから頑張ります。

## 第2夢「デアイ」

ナイクの部屋は、西側の窓から入ってきたオレンジ色の光がぼんやりと照らしていた。

「はあ~~~~」

深くため息をつく、やっと、やっと一日が終わったのだ。

底なしの安堵感がナイクを包んでいた。

よく他人は、孤独は嫌だという。

しかし、ナイクは違った。孤独が唯一の居場所だった。

ベッドへ寝転がる。太陽の匂いというのか、ふっかりしたベッドからはナイクの部屋とは違う

匂いがした。

おそらく母のアケミが昼間に布団を干したのだろう。と思った。急にまぶたが重くなると、赤子のようにナイクは眠りに落ちた。

.....

「.....おーい、起きるか!!」

「いつ!」

突然の怒鳴り声と、頭痛で目が覚める。

急いで起き上がり辺りを見回すが、外が暗くなっていてよく見渡せなかった。

明かりをつけて、再度みる。

ベッドのすぐ傍にある本棚からぬいぐるみが落ちていた。が、それ以外変化は見られなかった。

ぬいぐるみ。幼い時に拾った物だった。

一見、犬の様なぬいぐるみで、当時は名前をつけていたが忘れてしまった。

「なんで落ちてんだよ・・・ったく」

ぼやきながらもそのぬいぐるみを拾う。っと

「『・・・ったく』じゃねえっつの!!」  
「いたっ！」

パシッとナイクの頭を何かが叩いた。

驚いたナイクはぬいぐるみを手から放してしまった、がぬいぐるみは見事に体制を立て直して着地した。  
途端にナイクをにらみつけ、叫ぶ。

「しけた顔して入ってきたと思ったら俺に挨拶もせず寝やがって」  
「んな・・・ぬいぐるみに挨拶なんかしねえよ。つか、なんだよなんでぬいぐるみが・・・」

突然起こった出来事にナイクはわけが分からなかった。  
もしかしたら、自分はまだ寝ぼけているのかもしれない。  
そう思い、頬をつねるが、じーんと地味に痛みを感じただけだった。

「言つとくが、コレは夢じゃないからな」

「誰が信じるかよ」

「頬は痛かっただろうが？」

「・・・母さー・・・」

「親を呼ぶなんて、お前のプライドが許さないんじゃないのか？」

「なんで知ってるんだよ」

「それはだなあ」

コホンと小さく咳払いをすると、ぬいぐるみは自信ありげに胸を張った。

「俺様が魔法使い様だからだ。そして、お前が魔法の国ドリームキングダム之王様候補だからだ」

「・・・うそくさ。」

「何?! ほ、他にも知ってることは山ほどあるぞ、たとえば今日、お前はふられたのではなく・・・」

そういうと、様子をつかがうようにナイクを見るぬいぐるみ。

「お前から、彼女をふったこと、とか」

「なんでそこまで分かるんだよ」

お前。何も見てないだろが、とナイクは続ける。が、だんだんと声が小さくなっていった。

先ほどから繰り返し広げられている非現実的な現象の前ではありえないなんてことは無いような気がしていたからだ。

「ふん、そんなこと、聞かなくても分かるだろうが。」

「ああ、はい、まあ、なんとなく。っていうかぬいぐるみは動き出すし、説教されるし、おまけに魔法使いだとかなんとか言われたんじゃない、もう何が起きても驚かないと思う・・・」

「待て、大事なことが抜けているぞ」

「は? 何」

そう聞いた途端、何かものすごく嫌な予感がナイクの脳裏をよぎった。

しまった、聞くんじゃなかった。と思った。

ぬいぐるみは、またコホンと小さく咳払いをすると、真っ直ぐナイクを見た。

「お前が、王様候補だということだよ・・・夢野無幾。」

続。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3654d/>

---

dreamers ~ 追憶の王 ~

2010年11月16日12時09分発行